



TITLE:

天文同好會總會の記

AUTHOR(S):

TO

CITATION:

TO. 天文同好會總會の記. 天界 1932, 12(130): 75-78

ISSUE DATE:

1932-01-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/161751>

RIGHT:

天文同好會

總會の記

T O 生

(前記)

昨年の總會で1931年は広島でと決議されたので、微力な私達は非常な重荷を感じて居りました。10月始頃からボツボツ準備を始めました。

11月始大阪へ商用で 行き京都へ寄り池田、三宅兩氏と打合せ等を致し、歸廣致しましてからも、支部總會等を開き、準備を進めました。

11月15日、山本先生が広島文理科大学の天文學講師として來廣されました。先生にも種々と御相談申し上げ、市中へは講演會及び觀測會の立看板を出し、チラシを配り、各方面へ案内状を出す等して、日1日と近づく總會のその日を待ち望んで居りました。

(講演會)

11月21日——水野先生始め各地方から會員が來廣されました。

天文大講演會は広島高等師範の大講堂で18時30分から開れました。

眞田安夫氏の開會の辭に續いて、壱高の宮本正太郎君が、差支への爲め出席されぬ中村要氏の“望遠鏡の將來”の原稿を朗讀されました。

次に山本先生の“彗星の天文學”と題された御講演がありました。内容は天界へ載られる事と思ひますから略します。

講演が済んで山本先生の御説明で天文同好會製作の幻燈寫眞が映寫されました。宇宙の神祕を目のあたりに見、今更乍ら偉大さ壯嚴さに目をみはられました。休日續きや種々な集會の爲め來聽者は約 300名でしたが皆熱心な人ばかりでありました。出口で星圖、天體繪葉書等を希望者にお分け致しました。

(天文展覽會)

翌22日——うららかな小春日和、空はあくまで青く、太陽は ながやかに我等の前途を祝福するが如くに輝いて居ります。會員は京都、四國及び山口縣

其他より續々來廣されました。

9^hより大學の新館で天文展覽會が催されました。數日前から苦心して陳列されたもので、山本先生をして“珍らしい”立派な展覽會だ、いつまでもこう置いて1人でも多くの人に見せたい”と言はしめた傑作であります。大規模な出品物は有りませんでしたが京都其他からの出品は無くても、大部分を廣島で集める事が出来たのはうれしうございました。

其他、殿様愛用の望遠鏡や、星圖等を出品する事が出来なかつたのは残念でした。尚別室で中村饒氏考案の萬有引力の説明機を實驗してお見せしました。

其外に廣島地學同好會の和田氏より面白い文獻を大書して御出品下さいました。山本先生も非常に面白いと熱心に読んで居られました。會員の皆様にも是非御一讀をと思ひますので全記事を掲げさせていただきます。

總會

11月22日——13^hに大學へ集つた一同は、總會と懇親會を嚴島で一緒にする事にして、急行電車で嚴島へと急ぎました。(會場が嚴島の爲め出席出来ない廣島の會員が多かつたのは残念でした)我々を乗せた電車は美しい内海の海岸線を嚴島へとフルスピード。やがて電車宮島驛のブラットホームへおろされた一行は連絡船彌山丸へ乗り込みました。あそこがれの嚴島!そして大鳥居がかすかに見えるではありませんか!船室へ入る人はありません。みな上甲板へ上つて仕舞ひました。荒木健兒氏と私の讃歌合唱、やがて嚴島の棧橋へ着きました。會場の錦水館はほど近くにあります。行く道の兩側は土産物店のオンパレード。キヨロキヨロしながらもう土産物を物色して居る氣早な人もあります。

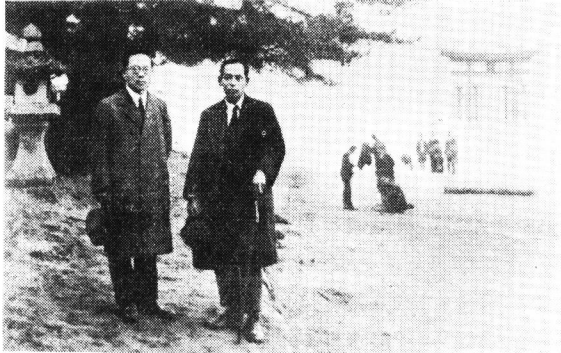
荷物を錦水館へおいて、一同は見物としやれかけました。ガイドは私。近道をして塔の岡へ昇り特別保護建造物の五重塔を見て千疊閣の中を小高い所か見て、上閣した事に致しました。“閣内に澤山あります處の杓子は敵をめし取ると言ふ意味で出征將卒が奉納したものであります”私の案内ぶりは100パーセントです。

長い石段を下ると嚴島神社です。紅ぬりの幅2間1尺長さ148間2尺の廻廊をうねりうねりと進行。日本一の木の鳥居を海上に見て祭禮の際のにぎはしさ、床の下まで海水にしたる事など説明し乍ら神社西口へ出ると、もう靴がキチンと並べてあります。“何んと早い事だらう”と山本先生の目がまるい。

神社を出て砂濱へ下りて記念撮影の後大願寺へと足を向けました。こゝは日本三辨天の一つ。池田會計殿の最敬禮には恐れ入りました。嚴島の戦の時

流血の巷と化した大元公園、こゝには 宮島ホテルがあります。そして、こんな海近くに樅の純林があるのは世界無比です。

植物學者池田政晴氏の日は猫の目の様にうごきます。大元神社前から 山の 中腹を迂回する逍遙道路へ出ました。途中の茶屋で名物「力もち」と コーヒーに力を付けて二重の塔を見て彌山登口へ達しました。もすこし早ければ 彌山登りも出来るものをと一同登口から上を見て残念そうに紅葉谷へと 足を向けました。



嚴島に於ける山本會長と水野副會長。

“こゝから紅葉が多くなります。紅葉のトンネルや鹿の遊ぶ楓の木の下を通り平松山へ登りました。嚴島神社、千疊閣、五重塔を一望の内に俯瞰出来る所。絶景なるかな！絶景なるかな！”一同

異口同音に禮賛、三宅義夫氏はしきりにパチリパチリとシャッターを切つて居られました。こゝから紅葉谷へ下り關西一の稱あるガーデンゴルフ場を見て紅葉谷公園へ出ました。美しい紅葉の中の道を釣べ落しの秋の日暮、神祕境に遊ぶ心地、紅色の橋、小川のせゝらぎ、すべてを夕霧の中にのみ込んで仕舞ふ頃、人が通れば店頭へ電燈を灯ける節約ぶり井上藏相がほ一びを呉れさうな物産店の前へ出て居ました。夕潮が廻廊へおし寄せて来る雄大さを見乍ら三笠濱へ出て會場錦水館の落付いたのは18^h 近くでありました。

私の挨拶の後總會の幕は切つて落されました。水野先生を 座長にして諸報告協議等約 2時間にわたりました。この内容も別に發表される 事と思ひますから略します。

やがて食事がはこばれました。飯氏夫人を加へて 賑はしく、雑談の内に山海の珍味を空腹へつめ込みました。

食後、中村饒氏のコミックを餘興として致しました。“引力を無くする法” “光より早い實驗” “舌へ針金を差す法” 等々一同をヤンヤと言はせました。天勝ハダシの御手際に山本先生水野先生等、不可思議さに 目をまるうして御座る。中村氏の居ない間々には私の種明し。一同 “何んだ！” “來年の總會までには一つ習つて置きたい” と山本先生のお仰せ。一同大はしやぎ。

汽車の都合で出發された人々を除いて、残る8人、水野先生 御發案の「星座かるた」を始めました。讀手は水野先生、池田氏の手の早い事、水野先生のインチキには恐れ入りました。私達の札は仲々出ない。最後に 山本先生と私との對陣になりました。たがひに1枚の持札、見る者も手に汗を握る大接戦。天下の天文學者を向ふに廻しての戦争、何くそ負けるものか！……… 勝利の旗は私に上りました。天文學者も若人の意氣には勝てません。其後花合式の方法をやり、夜の更けるのも知りませんでした。“星座かるた”、天文愛好家には是非御一遊をおすすめしたいと思ひます。そして一時も早く印刷されて賣出されん事を望みます。

(観 測 會)

11月23日——文理科大學新館バルコニーで 觀測會を催す筈でしたが生憎の曇天の爲め山本先生水野先生を中心に座談會を開きました。水野先生の 東京天文臺訪問前拂の憤慨談、京都にプラネタリウム 据付けの話、廣島天文臺建設の相談(廣島に大望遠鏡を寄附する特志家無きか?) 山本先生 “自分が来て一度も雨が降らない。天文臺としては最良の土地だ”とおつしやる。“思想善導と言つて話をしたり、いらぬ金を使ふより望遠鏡で大宇宙を 見せた方がどれほど有効だか知れない”と私も口を合せました。20^h 30^mの汽車で水野先生は御出發。22^h 近くまで雑談に過して、散會致しました。

23日の觀測會が駄目だつたので28日にと新聞へ廣告致しましたが、此の日もやはり駄目、翌29日も同じく曇りでした。觀測會にはどうも縁が無いらしいので中止する事に致しました。でも熱心なファン達は 曇天にかゝわらず毎夜20名近く押寄せて來ました。

(後 記)

11月30日——山本先生の送別會を開くつもりで居りましたが先生がお忙しいのと、種々都合でそれも出來ず。夜 5名の會員が吉川旅館へお訪ねしてお別れの言葉を申上しました。

12月1日——8^h 20^mの汽車で先生は廣島を御出發になりました。中村氏と私と2人でお送り致しました。

不完全ながらも大役を果させていたゞく事の出來ました事は實に感謝であります。折角遠路をお越し下さいました方々に對しまして、いたらぬ事ばかりで誠に申譯無く存じて居ります。

多忙の爲、汽車や電車の中で切れ切れに有りし日の 事どもを書綴つてみました。(12月7日)